
ファイアーエムブレム～時空の絆～ Second Chapter

エラクウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーエムブレム〜時空の絆〜Second Chapter

【Nコード】

N0521BA

【作者名】

エラクウス

【あらすじ】

決して交わるはずの無い存在がある。

剣と魔法の世界ファイアーエムブレム。

科学が発達し超能力の開発に力が注がれている学園都市。

相容れない二つの存在が交わる時物語は始まる。

テリウス大陸。

英雄アイクとその参謀セネリオは復興に尽力し、忙しい毎日を送っていた。

そこに起こる異変。

地球のどこにでもいそうな兄弟たち、別世界の英雄、マルス、シィダ、ロイ、リリーナはそれに呼応する様にテリウス大陸に現れる。

そこで始まる嘶をめぐる戦いは新たな局面へと移る。

アイクたち8人はテリウス大陸

兄弟たちのそれぞれの弟と妹は学園都市で

それぞれの戦いへと赴くことになる。

ファイアーエムブレム〜時空の絆〜第二章

開演

プロローグ〜五月雨。 心の中に降るものは〜（前書き）

少し遅れましたが、

ファイアーエムブレム〜時空の絆〜second Chapter

スタートです！

注意

これはファイアーエムブレム〜時空の絆〜の続編です。

先に前作を見ることをお勧めします

プロローグ〜五月雨。心の中に降るものは

「例の実験は順調に進んでいるようじゃの」

五月雨の降りしきる夜、13歳のベグニオン帝国の皇帝サナキは一人の男と会談していた。

男の服装はポリエチレン製の黒コートを目深に被っており、顔は確認できない。

「ああ、問題はねえよ。心配すんな、信用できる奴に任せてある」

「お主の信用を得るとは、よっぽど人の良い奴なんであろうな。会ってみたいほどじゃ」

「チツ・・・調子に乗んなよクソガキが」

男は不機嫌そうに舌打ちする、明らかに皇帝に対する口の利き方ではないが、サナキは全く意に介さず、呑気にテーブル上の紅茶を啜^{すす}っていた。

「まあ良い、お主の目的は知らぬが、きっと必要な事なんじゃろう？」

「チツ・・・」

男は再び小さく舌打ちをする。

「悪いが答える義理はねえよ、もオ用が済んだなら俺はもオ帰らせてもらっぜ」

そう言っつて男は部屋を出ようとする。

「待て、帰る前に一杯ぐらい飲んでいったらどうじゃ？」

「あん？」

サナキは男を呼び止め、紅茶を一杯を男に押しつける。

しかし、男は不機嫌そうな顔をしながらサナキの方に押し返した。

「俺はコーヒー派なんだよ。それもビダーの効いたきついブラックコーヒーがな。紅茶なんて甘ったるいもの飲ンでたら、胃が溶けちまつかもしんねえぞ。」

「無礼な、これは貴族の嗜みぞ。胃が溶けるわけなかるう。まあ、嫌なら無理に飲まなくとも良いが・・・」

そう言っつと、押し返された紅茶をぐびぐび飲み始めた。

ものの5秒で飲み終わり、『ぷはー』と酒を飲んだような声を出す。その様子を見て男は思わず苦言を呈した。

「天下のベグニオン帝国の皇帝がそんな事してイイのかよ。セフェランの野郎に見つかったらどやされるンじゃねエか？」

「セフェランは普段塔におる。心配するだけ杞憂じゃ」

そう言うなり、サナキは窓から塔を見上げる。数ヶ月前の激戦の舞台となった女神の塔。今では立ち入りが以前よりさらに厳しくなっている。

「臣下がおらん所くらい自由にさせてくれ」

平和の象徴であるこの塔を見上げて、サナキは自然と手を握りしめていた。

「ンじゃ、こんどこそ俺はもオ帰らせてもらうぜ。こっちだって暇じゃねエンだ」

「待った」

「ンだよ、今度は・・・」

男は再度呼び止められたが、立ち止まるだけで振り向きはしなかった。

男の背中を見て、サナキは皇帝としてかけられる最善の言葉を紡ぐ。

「迷うでないぞ」

「あア？」

男は不意な言葉に思わず振り向く。そこには決して男の目を捉えて離さない『ベグニオン帝国皇帝』がいた。

「お主が何の目的で『あれ』を求めているのかは検討がつかん。じやがな、これからのお主は迷ってはいかん。自分が正しいと思える最善の道を選択していけ」

「何でそんな事俺に言うんだよ」

男は訝^{しぶか}しみながら頭を掻く。

それにより微量のふけが空気中に舞い、ふわふわと漂い始める。

「お主は心の中に深い闇を抱えておる、そつじゃろつ？目を見ているれば良く分かる。さっきの言葉はお主を導くための啓示じゃ」

「……………くつだらねエ」

男はサナキにゆっくり背を向け、その場から立ち去ろうとする。

しかし、扉の前で立ち止まりチツと舌打ちしてから、

「俺は昔から迷った事なして一度もねエよ、けどよ、もし間違った道を選んじまったらどオすんだ？俺が選んだ道が正しいなんて保証なンかどこにもねエぞ？」

「お主は間違わん」

「・・・」

サナキが反射的に断言するので、男も思わず言葉を失い、鳩が豆鉄砲を食らったような表情になるがすぐに顔の筋肉を正常な帰趨きせつに据える。

「何でそんな事断言出来んだ」

サナキは新たに引つ張り出して来た紅茶をコップに入れ、適度な砂糖を放り込む。

「お主の心の闇はあまりに深くて重いように感じる。過去をやってしまった許されない事があって、それを後悔しておるのじゃろっ？」

スプーンで紅茶を淡白にくるくると回しながら、その奔流の中に出て来た渦の中心点から目を逸らさない。
なおも続ける。

「お主に後悔の念がある限り何事にも最善の結果を求め続ける、もう二度とそんな事の無いようにな」

男は何も言えなかった。

自分にその理論の内容が当てはまるだろうか、そんな事の自問自答を続けていた。

そのうち今までの自分はそういう風に辿って来た事に気づいた。

心の中では雨が降り続けている。この五月雨は通り雨なのか、停滞した台風なのかはここではつきりする。

無意識かもしれない、もしかしたら後悔なんかしていなかったのかもしれない。

ただ単に自分のして来た事がそうになっていたにすぎないのだ。

そう考えていると不思議と気持ち晴れた。

「フツ・・・」

男は何時の間にか垂れていた頭こぶを上げる。

「また今度来てやつから、次はブラックコーヒー用意しとけよ、ンじゃ、俺はお暇っ」と

「うむ、コーヒー豆とやらをお主が持って来ればいつでも作ってやるうではないか」

既にドアへ足を向けていた男はノブに手をかけながら振り向く

「ハッ、コーヒーベルトから極上のモンを持って来てやるよ」

男はゆっくりとドアを開け放ち雨の中へ足を踏み出す。

五月雨の勢いは相変わらずだが、男の心は小雨だった。

男にとって雨など自分の能力を使ってしまうえば、繊維の一筋も濡らさずに済む。

しかし、男はそうしなかった。

まるで自分の心に足りなくなった何かを補おうとする様に体の芯まで水をまとった。

男の胸にはある思いが芽生えていた。

それはどうしようもないほど、脆^{もろ}くて、だけど力強い。

強き信念を揺るぎないものにする。暖かな思いだった。

男が開け放ったドアがゆっくりと閉じた瞬間。

宙を舞っていたふけが、

静かに床に落ちた。

その余韻を感じさせる部屋の中、窓の外を見ていたサナキは紅茶をまたつぎ始めた。

その紅茶はまるで男の心を表す様に穏やかな波目が揺れていた。

男の名前は一方通行。
アクセラレータ

学園都市のLEVEL5元第一位である。

プロローグ②五月雨。心の中に降るものは③（後書き）

プロローグは三日連続で投稿する予定です。

これからもこのシリーズをよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0521ba/>

ファイアーエムブレム～時空の絆～ Second Chapter

2012年1月1日01時47分発行